

2024 年度 テクノ未来塾「産業デザイン財団賞」授賞式 報告書

-
1. 開催日：2025 年 3 月 22 日（土）午後
 2. 開催場所：大阪おおきに会議室（リアル会場）・オンライン（ZOOM）
 3. 参加者：関西・中部・関東より参集したテクノ未来塾メンバー
-

今年度の「産業デザイン財団賞」授賞式は、大阪おおきに会議室を会場に、オンラインもつなげて執り行いました。以下のとおりご報告いたします。

.....

1. 理事長挨拶（理事長 阿部 惇氏）

テクノ未来塾「産業デザイン財団賞」は、2020 年度よりスタートし、今年度は 2 期目、通算 5 年目となりました。

今回受賞された竹下さんは、「品種ナビゲーター」という高い専門性を有する方ですが、その「専門性」と「物語性」を融合する、という全く新しい発想法を提唱されました。



その内容を、竹下さんが NHK の「視点・論点」（2024 年 11 月 5 日放映）で話されたことをベースに具体的に紹介したいと思います。

初めに、「果物消費量の継続的減少」という課題を明確にした上で、それを解決するための二つの論点を提示されました。

一つ目は、たとえば、柿といっても複数の種類があるので、食べ比べをして自分の好みを発見して欲しい。二つ目は、「果物×歴史」の視点からみると、それぞれの果物に愛着がわき、ファンになれる、というものでした。

果物の栽培農家だけでは難しいので、同業者でイベントを開催するか、地方創生の立場から公的機関が開催する、等々連想が湧き出てくるお話を伺いました

受賞対象となった竹下さんの取り組みは、企業から独立して専門分野を中心に様々な活動を繰り広げながら、書籍（中公新書『日本の果物はすごい』）出版という活動成果を通して社会に新たな価値を提供し、自分自身の自立も果たす、という素晴らしい事例だと思います。

特に、技術の話、歴史の中に埋もれている物語、そしてそれらと産業をつないでストーリーをつくっている点、すなわち、技術をストーリー化している点が、特にユニークな点です。

今後も、豊かな未来社会に貢献する独創的な活動を進めていただくことを期待して、ここに表彰いたします。

それでは、表彰状を読み上げます。

表彰状 産業デザイン財団賞

品種ナビゲーター 竹下 大学 殿

開発技術名

歴史と物語で果物育種の魅力を伝え

生産と消費をつなぐ新たな価値を創出

あなたは頭書の事業において専門性と物語性を融合した新領域を
創出し自立を果たされました その成果は技術者の自立と社会への
新たな価値提供に顕著な貢献をされましたので これを賞します

令和7年3月22日

特定非営利活動法人 テクノ未来塾

理事長 阿部 惇

一般財団法人 産業デザイン

理事長 橋本 久義

以上です。竹下さん、おめでとうございます。

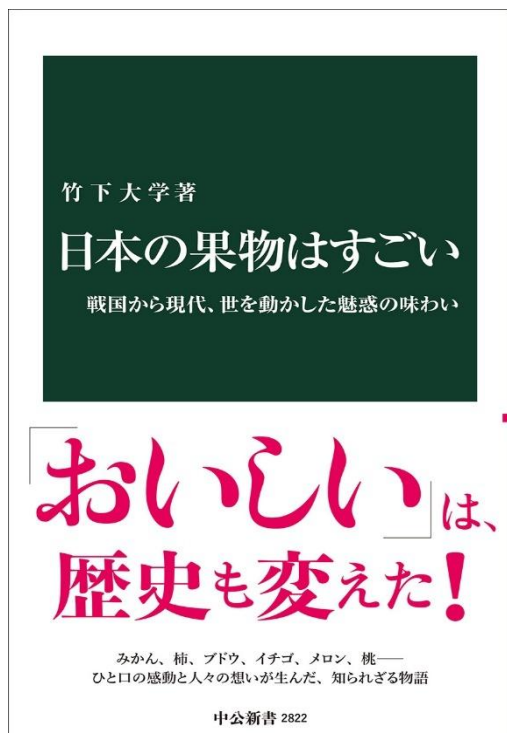


2. 受賞者のスピーチ（竹下 大学氏）

この度、「産業デザイン財団賞」をいただくことができ、とても光栄です。テクノ未来塾という組織があり、明るく夢のある未来社会の共創に挑戦する仲間がいたことが受賞につながったと、本当にありがたく思っております。

『日本の果物はすごい』のサブタイトルは「戦国から現代、世を動かした魅惑の味わい」です。じつはタイトルを含めて著者としてもっとも思い入れのある言葉は、サブタイトルに含まれる「世を動かした」なのです。これはどのような分野にも言えることですが、社会を動かしたモノや出来事の背景には必ず何らかの技術が潜んでいます。しかし残念なことに、技術にまで興味を抱く人は世の中のごく一部です。それどころか技術屋であっても、自分の専門分野から少し離れた分野には関心を示さなかったりします。さらにたとえ自分の専門分野であったとしても、過去の技術やその技術が生まれた歴史的背景までを知ろうとする人はわずかです。

私の専門分野は花です。正直申し上げまして、業務として果物にかかわったことは一切ありません。こんな私が果物についての学術新書にまとめ上げようと決意した理由を、表向きの話、裏の話、裏の裏の話の3つに分けてお話させてください。



まずは表向きの話です。建前と言ってもよいでしょう。ひと言で申し上げれば、「果物×歴史」というコンセプトで、人々の興味関心を縦横無尽につなぐためです。人、時間、地域、技術、産業という複数の領域にできてしまう様々な壁を、果物と歴史という切り口で壊し、新たな視点で物事を見られるようになる補助線の役割を果たす本を目指しました。すなわち、技術伝承や人材育成のツールにもなり、果物にかかわるすべてのプロの役に立つ1冊にすることをです。

その原動力となったのは強烈な危機感でした。農学においては、本来この部分は大学の先生が担ってきていました。しかし、このような書籍の執筆が研究対象と認められなくなってしまったことにより、続ける先生がほとんどいなくなってしまったのです。

私が社会人になったころに既にそのような状態に陥っていました。過去から現在にかけて、産業全体を俯瞰できるような本は出版されなくなっていたのです。なかったら自分で作ってしまえ、といってできた本なのですが、幸いなことに上梓以来、育種会社の研究開発スタッフやワイン技術者対象にセミナーを行ったり、地方自治体から未来に向けてというテーマで講演を

依頼されたりと、活動の幅を広げることができてきています。

・地方自治体（徳島県海部郡美波町）
主催のイベントにて講演（2025/3/26）

次に裏の話です。言い換えれば私の欲についてです。構想を考えストーリーを練ってから、本を上梓するまで3年ほどかかっていますが、本を書く原動力は、起業後の自分の名刺代わりになるような本にすることでした。出版した本によってある程度の信用が得られたり、名前を売ることできる、というのが率直な狙いであり願望でした。

執筆時には具体的な目標を3つ立てました。

1つがベストセラーにすること、もう1つが「新書大賞」のベスト20に入ること、最後が何らかの賞をいただくこと、の3つです。残念ながら前者ふたつは既に望み薄となってしまうましたが、何らかの賞をいただくということは今回、叶ってよかったなと思っています。

最後に裏の裏の話です。商業出版である以上、一定数の販売見込みが立たなければ出版企画は通りません。逆に言えば、販売見込みさえ立てばその道のプロでなくても商業出版は可能だということです。実務経験がないからこそ、誰にでもわかりやすい内容にまとめられるはずだという、当初の仮説は正しかったと思います。また、気持ちの上でも書きやすくなるというのは思いがけない発見でした。「実務経験がないから書けない」ではなく、「実務経験がないからこそ書ける」といった気持ちで、ぜひみんなにも書きたい内容にチャレンジしてみたいと思います。

裏の裏の話は、裸の思いの結晶、という言葉になります。言い換えると、業務で続けられなくなっても一生やり続けたいことは何か、です。

私の場合は、自分ならではのやり方で「植物好き」を世の中に増やしていきたい、に尽きます。この実現に向かって、今回の賞もその実績としてPRさせていただきたいと考えております。

本日は誠にありがとうございました。



4. 選考委員会 委員長より講評（理事 中村 善貞氏）



2024 年度の産業デザイン財団賞は、竹下大学さんの『日本の果物はすごい 一戦国から現代、世を動かした魅惑の味わい』出版 食と農の産業基盤につながる新たな視点の提供」に決定しました。その推薦理由をお伝えします。

竹下さんの著書『日本の果物はすごい 一戦国から現代、世を動かした魅惑の味わい』は、農業、歴史、技術の三軸を織り交ぜた独創的なアプローチで、消費者のみならず農業関係者にも新たな視点と価値を提供することにより、食と農の産業基盤強化に貢献されています。この活動が以下の観点において、産業デザイン財団賞の理念にふさわしいと判断いたしました。

1. 技術者としての自立・自律の実現

竹下さんは、企業から独立後、自身の専門知識とスキルを活用して、新たな社会的価値を生む活動を展開されています。その活動の成果として、専門書籍の出版にとどまらず、NHK「視点・論点」やラジオ出演、講演会等で幅広く認知を広げ、技術者としての自立・自律を象徴されています。

2. 専門性と新たな社会的価値の創造

本書では、深い専門性を背景に、育種という特殊な分野を分かりやすい言葉で社会に広め、読者の知的好奇心を掻き立てることに成功しました。「歴史」という軸を取り入れた独自の視点は、他の専門書にはない新たな社会的価値を生み出しています。

3. 社会的インパクトと次世代への波及効果

竹下さんの活動は、消費者の果物に対する認識を深めるとともに、農業振興や地域経済の活性化につながる可能性を提示しています。また、専門性を持つ技術者が社会との接点を持つことの重要性を示し、他の塾生・会員や広く技術者への刺激となる良いロールモデルとしての役割も果たしています。

4. 活動のユニークさと展開性

果物という身近なテーマを通じて、新しい知識と楽しみ方を提案する竹下さんの活動はユニークかつ新鮮です。その影響は、書籍出版後のメディア出演やイベントへの参加などを通じてさらに広がり、今後の発展が期待されています。

以上から、竹下大学さんの活動はテクノ未来塾「産業デザイン財団賞」の理念である「技術者の自立・自律を応援し、技術の発掘・普及を支援する」に完全に合致しており、同賞にふさわしいと確信いたします。